



おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）
東京で大学・研究室生活を経てUターン
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビュアーの仕事をするうちに、
方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる
心理学・新潟学講師、日本語教師、経営学修士(MBA)、新潟郷土史研究会会員

著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）

「おもしろ えちご塾」（恒文社）

「郷土とことわざ」「ことわざを楽しく学ぼう、社会・文化・人生」

（人間の科学新社・共著）

「明治大学政経論議 2016年度（新潟美人）」（明治大学政治経済研究所）等

「しんで、痛い」

とんときで、とたらばたらしているため、またもやとっぱずけの怪我をしてしまいました。字数制限と個人情報のため、ここでは詳しく書けませんが、あじごとしながら急いでいたせいか、右肋骨、背骨付近と右肘あたりを強打したのです。骨に異常がなかったので、怪我自慢がてら某所のごつつおの会に直行。たんぱく質とミネラルをふつつ撰ったので翌日痛みも忘れて、普段以上に重い荷物を持った途端、患部が「ピキッ！」と音を立てて筋断裂、まさに魔女の一撃、新潟の妖怪に背後から肩を叩かれた気分でありました！

起きて「あたた」、寝て「あつつ」、パソコン入力、板書も「いたた」。講義中、福祉住環境を学ぶ心優しき学生諸君が、「車椅子持ってきましょうか？」「ポータブルトイレ（！）持ってきましょうか？」と配慮してくれましたが、有難く辞退いたしました。

さて、その後、肘をみてたまげました！腰と背中を庇うために体を支えた部分が、葡萄色に変化しています。しかも広範囲。そこで思い出した古い新潟弁、それが「しんでる」です。「あっ、痛い、しんでる」「階段の段鼻に脛ぶついたら、しんでた」というように、打撲で内出血、皮膚が赤紫か暗褐色に変色した状態を表現する「身体表現」です。

「しんで、痛い」→「死んで、痛い」??? これまた不思議な言い回しです。これは損傷した箇所を「死んでいる」と表現すると思われるようです

が、古語「染む」が語源のように思えてきます。ドイツ民謡でおなじみの『ローレイ』の歌詞で「なじかは知らねど（途中略します、歌ってください）そぞろ身に染む」という文言がありますが、心に深く染み入るさまを想像していただければ、ぶつけた箇所内部でじわじわと内出血が拡がっていく感じがお分かりいただけるかと思えます。

この打ち身で内出血した状態やその部分を表現することばは、全国各地で「あざ」「赤たん」「青たん」「青はん」「青じ（ぢ）」「青なじみ」「青じみ」「青にえ」「ぶち」等々さまざま呼び名がみられます。県内のような「しに」系はどうか？と調べてみると、新潟から西、富山、静岡、岐阜、名古屋の一部と関西の一部で「しぬ」の表現や「しにあざ」の表現がみられることが分かりました。

この「しに」系の語源については、今ひとつ明確ではないようですが、我が肘の皮下出血が、じわじわと時間と共に拡がり、色調も変化していくそのさまは、まさに「内部で血液が染み出ていく」→「しんでる」→「しんだ」状態であると実感した次第です。何事も経験に勝るものはなし、転んでもタダで起きねて！としんだ跡に誓いました。

